

## 編集後記

---

第1回医薬ビジランスセミナーから2年後の今年1999年ようやく報告集刊行の運びとなりました。医療関係者だけでなく、患者、一般の方々の参加もいただいて、薬害の反省から入って医薬品の適切な評価をメインテーマとした会というのは、おそらく日本では初めて、世界的にもたぶん初めての画期的な試みだったのではないかと思います。

たくさんの分科会を並行して催しましたので、他の分科会でどのようなやりとりが行われていたのか知りたかったとの参加者の声も多く、あるいは3日間すべてに参加できなかった方もいらっしゃいます。このセミナーは、1分科会だけに参加して事足りりとするものではありません。主催者としては3日間を通して参加していただくことが目標でした。日本の薬害の構造、根っこにあるものをきちんと認識すること、患者・市民の立場で出来ることは何か、医師を始めとする医療関係者がどのように自身の仕事と向き合うか、あるいは行政や製薬企業に何をどのように求めていくか、そういった医療のあり方全体をさまざまな方向から点検していこうとしたセミナーでした。

2年前の報告集を今さら刊行する意味があるのかという声も聞こえそうですが、私たちは十分にあると思っております。ここで報告されていることや、討論されていることは、2年経っても、少しも色あせておりません。むしろ、2年前に指摘したことが、今になって実現していております。そのような状況を予測している面が多々あります。

是非、報告集の全体をお読みください。そして感想をお寄せください。

報告集作成にあたって、それぞれの講師の方々には、お忙しい中、講演だけでなく、原稿の校正も快く引き受けていただき、本当にありがとうございました。また、住吉純子さん（アトピー・ステロイド情報センター）、勝村久司さん（医療情報の公開・開示を求める市民の会）、栗原敦さん（予防接種情報センター京都）には、それぞれ「アトピー性皮膚炎とステロイド」「陣痛促進剤」「予防接種」のセッションのテープ聞き取りにご協力を頂きました。また、会場からも多数の発言をいただき、その校正にもご協力いただきました。ご協力頂いたすべての方々に、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

セミナー最後の代表からの挨拶にありますように、このセミナーはTIP/JIPを支えて下さる非常に多くのボランティアの方々のご協力で、催すことができました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、今後もよろしく願います。

1999年9月  
医薬ビジランスセンター JIP  
事務局長 坂口啓子